ファーストステージクライシスの実態とその支援
― 絵本の読み聞かせ場面に焦点をあてて ―

内藤知美　　井戸ゆかり

ECEC Teachers' Difficulties and Crises on the First Stage and Supporting System:
Focusing on the Story-telling of the Picture Book

Tomomi Naito　　Yukari Ido

要旨：

本研究は、成長実感を伴う形での、保育者の資質向上に寄与する現職教育・研修システムの構築を目指す研究である。特に養成段階の「保育者になる」から現職段階の「保育者である」という認識に移行するプロセスにあるファーストステージの新任保育者に注目し、困難さ、危機の実態と支援のあり方を明らかにする。

方法として、新任保育者が関わる実際の保育場面（ここでは絵本の読み聞かせ場面）から、困難さや葛藤の状況、それに対する対応、改善方法について、質問紙調査とインタビュー調査を行った。

結果、読み聞かせ場面での困難さは保育者の知識や技術の不足が要因である。また「一人ひとりへ対応をすることが重要であると感じながらクラス全体をまとめなければならない」という意識が強く働き、葛藤が認められる。保育場面の困難さを克服する学びの方法として、新任保育者は先輩保育者を「真似る」。しかし実際には先輩保育者の保育を見る機会が保障されていない現状がある。インタビューからは、保育の相談をするという直接的な援助を求める際の言語化の不足が課題であることが分かった。支援として、新任保育者の成長プロセスを考える時、新任保育者の閉塞感を取り除き、視野を広げるためには園外研修の機会を増やすことも考えられるがその有効性は限定的であり、まずは園で日々の保育や子どもの姿を共有する小集団での学び合いの場の質を高めることがより有効であると考えられ、そこでの先輩保育者の支援のあり方が鍵となることが示唆された。

キーワード：

ファーストステージクライシス　新任保育者　成長プロセス　絵本の読み聞かせ　「真似る」

Ⅰ　研究の目的

これまで著者らは成長実感を伴う形での、保育者の資質向上に寄与する現職教育・研修システムの構築を目的として研究を進めてきた。「保育者の資質向上と現職教育（1）～（4）」（日本保育学会62回大会～64回大会・ポスター発表）・「成長プロセスを踏まえた現職研修・教育を考える－ファーストステージ・クライシスを支えるために－」（日本保育学会65回大会・自主シンポジウム）の一連の発表において、成長プロセスの中でも、ファーストステージにある実習生や新任者が、「保育者になる・保育者である」という意識を獲得できるか否かが、その後の保育者としての専門的資質の向上につながることが示唆された。

保育者の専門的資質の向上は社会的要請でもある。文部科学省は、2002（平成14）年に「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために－」（幼稚園教員の資質向上に関する

調査研究協力者会議　2002）において、保育の質の低下は保育者自身の人間力、実践力の欠如によるものであり、保育者は自己の課題を明確にし、将来にわたって成長していくことが求められるとし、自ら学ぶ保育者像を示した。[1]

また保育者養成においても、保育の質の確保は保育者の質的向上と不可分であり、保育者の専門性と人間性に基づく保育者の養成によって将来の保育の質を確保しようとしている。

2006（平成18）年7月11日に中央教育審議会で答申された「今後の教員養成・免許制度の在り方について」においては、教職課程の質的水準の向上が目指され、保育者の養成課程においては、入学時のガイダンスの際に、学生に対して各大学が養成する教員像や教職課程の到達目標等を十分に理解させることが必要であると述べられている。しかし、もちろん養成段階では到達しない課題が多く残されることも事実である。[2]

このように保育者養成の方向性は、養成段階から目指す保育者像を明確化し、養成段階から現職への移行を円滑に行い、将来にわたって成長しつづける保育者、またそのために自らあるいは園において、D.A.Schon（ショーン）が専門家の思考方法として概念化した「省察する実践家」[3]を標榜している。

しかしながら、その一方で、保育者養成が志向する方向とは相反するように、「保育者になる」という意識から「保育者である」という認識にいたる過程[4]に位置する新任保育者が早期に離職するケースが多い事実がある。このことは、保育者としての熟達化の起点において何らかの阻害要因が生じていると考えざるをえない[5]。

そこで保育者の熟達化の過程を阻害する要因を仮定し、その実態を総称して「ファーストステージクライシス（プレ保育者の段階から新任の保育者におこる不安や自信喪失、意欲低下等に関する保育者としての成長の危機）」と命名し、ファーストステージクライシスの実態をとらえ、その具体的支援を構築したいと考えた。

ファーストステージクライシスが引き起こされる要因は保育の場を取り巻く労働環境、人間関係、個人的資質など多様でありかつ複合的に要因が絡むがゆえに具体的な支援を模索することは必ずしも容易ではない[6]。

本研究では、これまでの研究から示唆された、多様で複合的性質を有するクライシスの実態を「保育者としての成長」に着目して、具体的な保育場面からアプローチを行うものである。これまでの研究において、ライフステージにおける「危機」、例えば障害を含む「気になる子ども」を担任し、保育者がその際に行う保育の振り返りが保育者の成長の契機になるという研究は散見される[7]。今回は、気になる子どもといった事象ではなく一般的な保育活動における課題を明らかにするために、絵本の読み聞かせ場面を取り上げて、新任保育者の保育活動における困難さや葛藤の内実およびそれに対して保育者がいかに対応しているのかを検討する。

Ⅱ　研究の方法

上記の実態をより具体的につかむための方法として、まず、新任保育者が読み聞かせ場面で困難であると感じることおよびそれに対する対応について、質問紙調査を実施した。

調査は、2012年8月に実施した。アンケート調査の対象者は、K県の私立幼稚園の教諭であり、実施にあたっては筆者らが関わったK県の初任者研修での協力を得て行った。

調査協力者は132名である。そのうち現在の職に就く前に保育職の経験がある保育者を除いた120名のデータを対象に分析した。アンケートの記入方法は、無記名自記式で行った。

次に、上記アンケートの実態を深めるために、新任幼稚園教諭（対象者２名。２名はともに保育経験年数６か月）に対して、2014年５月および9月に、絵本場面などの保育場面を含めた幼稚園教諭１年目の保育職の困難さや葛藤全般についてインタビュー調査を行った。

インタビュー調査にあたっては、録音テープを用い、内容を逐語的に起こして、意味のまとまりごとに分節化し保育場面の葛藤や困難さの内実を検証した。また協力者の了解を得て、倫理的配慮をもって実施した。

Ⅲ　結　果

(1) 絵本の読み聞かせ場面における困難さ

保育場面の一つとして、絵本の読み聞かせ場面を取り上げ新任保育者が抱える困難さ、葛藤の内実を検討した。絵本の読み聞かせ場面で感じている困難さについての自由記述をカテゴリー化し分類した。１文章を最小単位とし分析した結果、表1のように159件のデータが得られた。

絵本の選択の知識がないことや読み聞かせの技術の不足を挙げる回答は103件であり、全体の64.7%である。読み聞かせ中の子どもたちの反応の受け止め方ややりとりの方法については50件で、全体の31.4%である。この二つが大きな割合を占めていることがわかる。

まず絵本の選択の知識がないという回答では、子どもの発達にあった具体的な教材を選ぶことの難しさがあげられている。１年目の保育者は、「絵本を選んでいる時間的余裕がない」「とりあえず園にある絵本ですませてしまう」ことが多いようである。読み聞かせの技術の不足では、導入の仕方、読み聞かせの際の表現力、絵本の終わり方があげられている。１年目の保育者からは、下読みをする時間が確保できず、とりあえず読んでみる。そのため登場人物のそれぞれの言葉が同じ声になるといった困難さが引き起こされる。

絵本の読み聞かせは、絵本を介した保育者と子どもの相互応答的な経験によって作品の理解が深まり、共感性、情緒性、内容の理解力などを育てる。しかし、新任保育者は、子どもへの声かけややりとりの方法など相互応答的な対応について困難さを感じ、その数は50件に上る。

表1.　読み聞かせ場面で困難さを感じていること

内　容	件　数
絵本の選択 年齢にふさわしい絵本、異年齢児の絵本、行事・季節、子どもが楽しめる絵本の選択	28
読み聞かせ技術の不足	75
・導入の仕方 ・声色の使い方、バリエーション ・声の大きさやスピード、間、リズミカルな場面の読み方、強弱 ・絵本の終わり方 ・絵本の世界に入る読み方	8 28 17 18 4
子どもへの声かけ、やり取りの方法	50
・集中しない子どもとその声かけ ・読み聞かせ中の子どもの反応・言葉の受け止め方	21 29
絵本の世界が子どもに伝わっているか、理解できているのか不安	6

さらに自由記述に着目すると、「子どものペースではなく、自分のペースで読み進めてしまう」、「子どもの反応に対応しきれない」、「23 人分の反応に対応できずアタフタしている」、「全員の子どもたちを集中させたいが難しい」、「全員が楽しめる絵本の選択がわからない」などの記述がみられる。

絵本の読み聞かせは「終りの会」などクラス全体で行われることが多い。アンケートの自由記述の結果からは、読み聞かせにおける子どものそれぞれ異なる反応を前にして、「子ども一人ひとりを受け止める」ことと「クラス全員をまとめる」ことの両方を目指している新任保育者の姿が読み取れる。新任保育者は、一人ひとりの子どもを受け止めることが保育者の役割であると認識しており、「一人ひとり」を受け止めることへの強い意識がある一方で、クラス全体、子ども集団をどう指導していくのか、「個としての子ども」と「クラス集団」に対応しなければならないといったせめぎ合いの状態に置かれていることがわかる。しかも、その際、新任保育者は絵本の知識や読み聞かせの技術が不足していると自ら認識するため、保育の困難さや葛藤場面となる。

絵本の読み聞かせは子どもが絵本の世界に興味や関心をもって絵本の世界を楽しむことが重要な目的である。しかし新任保育者のアンケートでは、子どもが絵本の世界をどのように受け止め理解するのかへの関心を示す記述は少ない。例えば、「絵本の世界が子どもに伝わっているか、理解できているのか不安」などと子どもが絵本の世界をどのように受け止め理解するのかを悩む回答は 6 件であり、3.7%と少ない割合である。

個々の子どもへの対応とクラス全体をまとめることの葛藤に直面する時、まずはクラスの子どもを掌握することが優先される。「いかに子どもたちを集中させるか」、「どう盛り上げるか」、「飽きさせないようにする」などの自由記述からもクラス全体の子どもを集中させたい思いが強い。子どもが絵本を楽しみ、絵本の世界が伝わっているかどうかについての視点を含む記述が少ないことからわかるように、「クラスをまとめる」ことに専心する新任保育者の姿が浮かび上がってくる。

120 名の保育者の絵本の読み聞かせ場面の結果からは、①絵本の知識・読み聞かせの技術が足りない②自分の予想と子どもの反応の違いを前に、子どもへの適切な対応ができない。③子ども一人ひとりへの対応を気にはしているが、まずは全体をまとめることが優先される。しかし全体をまとめる力の不足に悩む、④絵本の世界が子どもにどう伝わっているかなど教材を用いた子どもの変化そのものを振り返る余裕はないといった姿が読み取れる。

「子ども一人ひとりの反応を受け止める」ことと「子ども全体をまとめる」ことは、必ずしも相反することであるとはいえないが、新任保育者にとっては異なる方向性のベクトルとして認識されている。この葛藤の背景に、保育者養成段階において、「子ども一人ひとり」を見ることが理想であり、そのことを強く意識させている実態があるのではないか、また、個々の子どもを受け止めることと全体をまとめる力の関係について、どのように教育しているのかを改めて検討することは、新任保育者の困難さや葛藤を支援する意味でも重要な課題であるといえる。

(2) 困難な状況をどのような方法で改善するか

続いて新任保育者は、保育の困難さや葛藤を抱えた場合、どのような形での支援を得て保育の改善を試みるのかについて検討した。

絵本の読み聞かせ場面における新任保育者は、上記（1）の困難さ・葛藤に対してどのように対応し、それを改善しようとしているのかを表2および図1で示した。

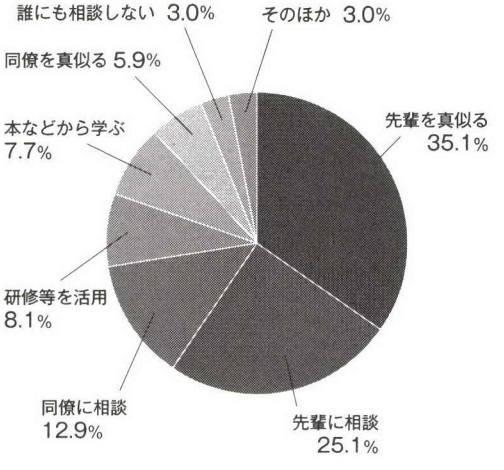
1. 新任保育者の学びの対象としての「経験のある先輩保育者」

困難に感じる保育場面（ここでは絵本の読み聞

表2.　読み聞かせで困難さを感じた時の改善方法

方　法	回答数（複数回答可）	割合（%）
経験のある先輩に相談する	68	25.1 %
同僚に相談する	35	12.9 %
先輩を真似る	95	35.1 %
同僚を真似る	16	5.9 %
本などから学ぶ	19	7.0 %
研修等を活用する	22	8.1 %
誰にも相談しない	8	3.0 %
そのほか	8	3.0 %

図1.　困難な状況に対する改善方法



かせ場面）に遭遇した場合の対応・改善の方法としては、図1のように「先輩を真似る」は全回答数の35.1%、「経験のある先輩に相談する」は25.1%である。両者の回答は、全回答数の60.2%をしめ、「同僚に相談する」は12.9%、「同僚を真似る」は5.9%であり、合計18.8%と大きく上回る。新任保育者の保育実践においては、経験のある「先輩保育者」の影響が大きいことが分かる。

2. 新任保育者の援助の求め方

困難な保育場面ではそれを乗りこえるために新任保育者はどのような援助を求めるのかについて、表2に示したように直接的援助と間接的援助に分けて考えてみたい。直接的に援助を求める項目である「先輩に相談する」「同僚に相談する」は、割合が38%であった。一方、先輩・同僚などに直接的援助をもとめるのではなく、間接的な方法で援助を求める「先輩を真似る」「同僚を真似る」「本から学ぶ」「研修等を活用する」の回答の割合は計56.1%であり、直接的な援助を求めるよりも高い割合であることがわかる。また「誰にも相談しない」「そのほか」の回答は6%であった。

「そのほか」の回答の具体的な記述をみてみると、「鏡の前で練習する」、「自分で絵本を読み、伝えることを考える」、「短大時代のノートや授業を思い出す」、「自分で色々挑戦してみる」、「いっぱい読んで練習する」、「自分なりに考えてみる」など、自分自身で読み聞かせの改善を図り解決しようとする新任保育者の姿が読み取れる。

3. 学びの方法としての「真似る」行為

読み聞かせに関する学びの方法としては、「先輩を真似る」「同僚を真似る」が41%と多く、保育者にとっての「学び」は「真似る」ことにあることがわかる。しかし、実際には、保育時間中は他の保育者の保育をみる機会はほとんどないことが現状であり、そのため保育者によっては、「どんなふうに読んでいるのか見てみたい」、「一日でもいいから他の人の保育全般を見たい」といった声が聞かれる。

(3) インタビュー調査による結果

絵本の読み聞かせ場面における困難さ、葛藤についてアンケートをもとに検証してきたが、その内容をさらに深めるために1年目の幼稚園教諭2名を対象に、インタビュー調査を行った。対象の幼稚園教諭は、A教諭(女性、4年制大学卒)、B教諭(女性、4年制大学卒)であり、調査は、第1回は勤務経験2か月時(2014年5月)、第2回は6か月時(2014年9月)に実施した。

2名の教諭には、①保育の形態、②保育者組織、③これまでに保育者として困難や危機を感じた事柄、④絵本の読み聞かせを含めて保育の場面で困難を感じた内容、⑤困難な場面での具体的な対応についての5項目でインタビュー調査をした。

A教諭とB教諭が勤務する園はともに首都圏の私立幼稚園であり、保育の形態は自由遊びとクラス全体による主活動を合わせた形態である。

5月の第1回目のインタビューの際には、「毎日無我夢中で、保育ができているとかできてないとか全くわからない」、「園の人間関係がわからないし、上の先生たちも私のこともわからないし、私の方も上の先生のことをよく知らないし・・」という内容が話された。「一日が終わればいいと思っている。あとは考える余裕などない」という言葉に象徴されるように、保育や子どもの育ちを振り返る余裕はなく「見通し」がもてずに一日一日の保育をこなす状況がある。その反面、幼稚園内の人間関係の話については多く聞かれた。

次に6か月の保育経験を経た後のインタビューでは、A教諭が「***先輩ともいい感じの関係になれて、笑顔で、子どものたわいのないはなしもできるようになった***」と述べるように、2か月時点よりも園の人間関係が理解でき、教諭間の関係が落ちついてきたことが語られた。

この2か月から6ヵ月の勤務の中で幼稚園教諭として困難な出来事については、例えばB教諭は遠足での下見(準備)が不十分でありそのことを注意された具体的な出来事を話した。

(園外保育に行ったとき)「遠足の荷物があったので、その場からだれもいなくなるのもどうかなと考えて下見にいかず残っていたんですけど・・、考えていたんですよ・・・(中略)・・・・こちらも行った方がよいですかとか聞けばよかったと後から思ったんですけど、(保育経験)3年目の先生からはあとで言葉にするのが足りなかったと言われて・・・言葉にするのが足りなかったなと思って・・・。でもクラスを仕切っていかないといけないし、行事も初めてで、園の外での行事だし、親もいるし・・・申し訳なさがでてきて、結構落ち込んだんですよ。その後に(そのことを先輩に指摘されて)気がはっていたのが全部涙になってでちゃって・・・」(下線部:著者加筆)

自分では考えて行動しているが、先輩に尋ねたり、確認したりして、直接的な援助を求める「言語化」が不足している。その一方で、「クラスを仕切っていかなければならない」、「初めての行事」、「保護者の前」、「申し訳ないという気持ち」など、新任保育者には様々な思いが交錯し、強い緊張を伴っていることがわかる。

またこの出来事から、「保育方法を“真似”て学ぶ主対象である」先輩保育者との距離が生まれた。先輩からそのことで注意を受けたので「***その先生のことを怖く思っちゃって、ずっと怖かったんですよ***」、「***夏にお泊り保育とかの行事もあるけど、自分から聞けなくて・・***」と孤立感を強めていく様子が話された。

一方、新任保育者になる前に10回程度事前の研修をしていたA教諭は、「***子どもたちの顔も分かる状況だったから、子どもたちに対する不安はなかったです。先輩との関係とかがちょっと不安だったけど・・***」との話が聞かれた。事前の研修が多く行われていたため、特に子どもに対する不安が少

なかったことが新任保育者の不安を軽減し、有効に働いたと考えられる。

A 教諭は、6 か月間の保育における困難な出来事について、絵本の読み聞かせに関しては、特別に困難と感じる場面ではないということを述べた上で、*「(A 教諭は) 保育者になる前から絵本の読み聞かせが好きだったので・・・。ただ絵本場面では集団を意識してクラスをまとめる読み方をしているんですが、聞いていない子どもがいる場合、この絵本の選択で良かったのかと不安になるときもあります」*という話が出た。先のアンケート調査にも見られたようにインタビューにおいても「クラスをまとめることと一人ひとりをよく見て保育することの難しさ」があらわれている。

A 教諭、B 教諭ともに共通するのは毎日のことで精いっぱいで、振り返りの余裕はないという意見である。

困難や葛藤を感じるといった余裕もなく、「見通しがない」新任保育者にとっては、経験のある先輩からのアドバイスが支援として有効である。A 教諭が勤務する幼稚園では、新任保育者には、先輩幼稚園教諭が指導者としての役割を担い、様々な相談や助言を行う形態をとっており、言語化の場が保障されていることが有効に働いていると言える。

絵本場面ではないが、A 教諭は、6 か月の保育経験の中で、保護者との問題を抱えた。*「保護者から初めてクレームがついて・・先生が一緒に遊んでくれないと子どもが言っていると言われて・・・。園便りも一生けん命書いているのに、子どもの様子が見えてこないと言われて、すごい頑張って書いているのに、休日を返上して書いているんですよ・・」*。さらに*「(その子とは) 保育中も問題がなかったので、特に自分 (A 教諭) も問題としていなかった子どもの保護者から子どもへの対応について不満が述べられた時は、正直ショックでした。気になる子どもはよく見ているけれど、比較的遊べていて問題がないと思っていた子どもに対しては、目が向けられていなかった。」*

先に新任保育者は一人ひとりに対応をしなければという強い思いを持っていると述べたが、実際には、「気になる子ども」に対してまずは対応をしており、それ以外のいわゆる「大丈夫と思っていた子ども」への対応が抜け落ちやすいことがわかる。

*「その時は (指導者の) 上の先生、先輩に相談したんですよ、そしたら園長とか、主任とかに相談しようと言われて・・・」*と、新任保育者の閉塞感を拓いてくれる先輩保育者の支援が見られる。

保育に関する困難さや葛藤を抱えた場合、園にそれを支えるシステムがあることが支援となる。保育の中味について話せるのは、2 人とも*「経験がないので、保育で何かあったら聞いてもらえるのは学年の先生との話し合いで・・・そこで今週は何を作ろうかとか・・子どもの様子も話せるのは学年会だけで・・・、学年の先輩 (保育者) が次はこうなるとか言ってくれて・・・それしか他のことはわからないから・・・」*との話がでた。

園内の保育の話し合いの中でも今の自分が担当する学年の話し合いが大事だと考えていること、同学年を担当している先輩幼稚園教諭の意見を最も参考にしている姿が読み取れた。A 教諭のように、*「(先輩保育者が) 指導教諭としてついているので実際厳しい時もあるけれど、指導を受けられることで (自分の) 先が見えない部分を支えてくれているのが一番大きい・・」、「やっぱり子どものことがよくわかっている (学年の) 先生と話すのが分かってもらえるというか・・」*とのことであった。

子どもの発達や子どもの姿を共有し、行われる学年の話し合いが「当事者性」をもつという点で、新任保育者にとっては保育の相談や学びの場となっていることがわかる。学年だけの話し合いではなく、学年の壁を越えてそのような話し合いの機会を数多く設けることがより有効であるようにも思えるが、「実

際に子どもの姿をわかってもらえる」保育者集団であることが要件であると言える。

また本研究に先行して行った調査において、保育に不安を感じるのは、「子どもへの適切な声かけができない」、「援助の手ごたえがなく、煮つまる」、「子どもの対応に悩んだり、自分の予想と子どもの反応が違う」、「クラス運営がうまくいかない時」であり、「今は（保育を）始めたばかりなので余裕がないが、長いスパンで子どもの成長を感じられると、充実するだろう」、「見通しがもてれば違うと思う」などの意見があった。新任保育者にとって様々な研修などの機会を設定して、そこで多くの人からの話しを受けても、自分を振り返り省察する余裕はない。むしろ保育そのものを共有する小集団の中で、先輩保育者からの先が見えない不安を払拭する援助と学びの場を持てることが有効であるように感じられる。

Ⅳ　考察および今後の課題

保育者の成長プロセスにおけるファーストステージの重要性を踏まえ、新任保育者の読み聞かせの保育場面を取り上げて、保育実践の困難さと状況の改善方法について検討した。

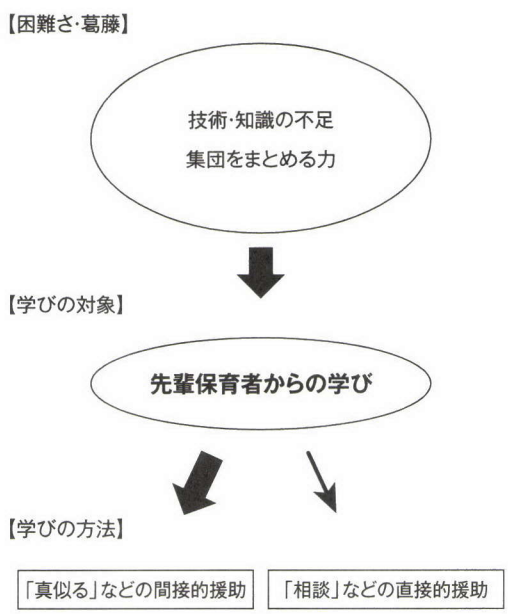
1）一般的な保育場面である絵本の読み聞かせにおける新任保育者は、自分自身の知識や技術の不足を感じながら、1人ひとりの子どもの違いを前に、クラス全員をどうまとめるかで葛藤や困難さを感じていることが理解できた。

2）その状況を改善するにあたっては、先輩保育者に援助を求める傾向が高いことが示された。しかし、一方で、改善のための援助の方法の求め方は、直接的な「相談」行為よりも「真似る」方法の割合が高いことがわかった。また自分自身の自助努力によって改善をはかる保育者も少なくない。自由記述の中には、「真似たいが通常の保育中はなかなか先輩の姿を見る機会がない」などの意見もあるように真似る場を園に確保することが重要な意味をもつ。

3）さらに新任保育者の内実を捉えるためのインタビュー調査から、①保育について新任保育者は自分なりに考えているが、それを言葉にして援助を求めるなどが十分にできない（言語化の不足）。②新任保育者の1年目は「見通し」がもてないことが保育者としての困難さであり、「見通し」の多くを先輩保育者に依存している。③日々の保育を通じて子どもの姿などの共通理解のある学年の結びつきが強く、そこでの話し合いが少ない学びの場となっている、ということがわかる。

図2に新任保育者の読み聞かせ場面の困難さと学びの対象、方法をまとめた。

図 2.　読み聞かせ場面の困難さと学びの対象・方法



鯨岡は、保育者の専門性が実践に生かされるためには、保育者が自身の保育を反省的に吟味する

ことが重要だとする。この「反省的に吟味する機会」をどのように保障していくかがファーストステージの新任保育者の課題である。

保育者が振り返りを行うためには、少なくとも1年間の経験が保障されることが必要であろう。山川の指摘[8]にあるように、1年目と2年目の保育者には、明らかに1年間の経験があるために、振り返りに差が生じる。あるいは保育者になるという段階から保育者であるという意識の変革への時期を迎える保育職1年目は「振り返る」という行為そのものが獲得される時期であるとも言える。

新任保育者の学びの方法、場について考える時、学びの機会を増やしていくことは有効であろうが、新任保育者の置かれた状況を共有し保育者としての育ちを踏まえた支援が求められる。

例えば、全国保育士養成協議会の平成21年度課題研究「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査」[9]によると、保育者は卒後6年目では「職場以外の研修に参加する機会」が多くなるが、卒後2年目では「自分で保育の内容や教材を研究する」ことが主であることが報告されている。たとえ制度的に、初任者研修などが設定されたとしても、経験の少ない新任保育者は、「自分で」あるいは「自分が真似ることができる範囲の学び」を求める。保育者自身は一日一日をこなすことで精いっぱいなのであり、むしろ日々の保育や子どもについて話せる園内の小集団での研修の質を高めることが、何よりも有効なのではないかと考えられる。さらに、保育全般のモデルとなる先輩保育者の指導の役割が問われる。保育を真似る環境を与えること、また直接的な援助を求める言語化の能力を育てることが課題である。その際、公立幼稚園等の一部に導入されている「メンター」制度の実態を検討していくことが有効ではないかと考える。

新任保育者の困難さ・葛藤の状況およびその対応は、例えばトラブル場面、保護者対応、個別あるいは全体の活動、行事などといった保育の場面によって異なる。またその背景には保育の形態、保育者組織が影響していると考えられる。今回は絵本の読み聞かせ場面を取り上げたが、今後、さらに保育の代表的な場面を取り上げ、ファーストステージ保育者が「保育者である」という意識を獲得できるよう現職教育・研修のあり方を検討したい。

註

(1) 文部科学省　ホームページ　http://www.mext.go.jp/ 2014年10月1日閲覧

(2) 文部科学省　ホームページ　http://www.mext.go.jp/ 2014年10月1日閲覧

(3) ショーン,D.A.（2001）　佐藤学・秋田喜代美訳「専門家としての知恵－反省的実践家は行為しながら考える－」（ゆみる出版）

(4) 小泉裕子、田爪宏二（2005）『実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究－保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連－』、鎌倉女子大学紀要第12号、13-23
田爪宏二、小泉裕子（2012）『保育者志望短期大学生における「保育者アイデンティティ」の確立を既定する要因の検討－実習終了後における保育者のイメージ及び就業意識の調査から－』、保育士養成研究第29号、11－20

(5) 秋田喜代美（2000）「保育者のライフステージと危機」『発達』83号 Vol. 21（ミネルヴァ書房）48－52

(6) 鯨岡峻（2000）「保育者の専門性とはなに」『発達』83号 Vol. 21（ミネルヴァ書房）53－60

(7) 研究としては、山川ひとみ（2009）「新人保育者の1年目から2年目への専門性向上の検討－幼稚園での半構造化面接から－」（保育学研究　第47巻第1号）31－41、金珎志（2009）「新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方－保育実践後の「保育者間の話し合い（対話）」の中から－（保育学研究　第47巻第1号）66－78、谷川夏美（2013）「新任保育者の危機と専門的成長－省察のプロセスに着目して－（保育学研究　第51巻　第1号）105－116などがあげられる。

(8) 山川（2009）前掲論文

(9) 全国保育士養成協議会編（2010）『保育士養成資料集』第51号

引用・参考文献

・ショーン ,D.A.（2001） 佐藤学・秋田喜代美訳「専門家としての知恵－反省的実践家は行為しながら考える－」（ゆみる出版）

・秋田喜代美（2000）「保育者のライフステージと危機」『発達』83 号 Vol. 21（ミネルヴァ書房）48 － 52

・桜井厚・小林多寿子（2005）『ライフストーリー・インタビュー質的研究入門』（せりか書房）

・全国保育士養成協議会編（2010）『保育士養成資料集』第 51 号

・高濱裕子（2001）『保育者としての成長プロセス』（風間書房）

・内藤知美・井戸ゆかり他（2009 ～ 2012）日本保育学会 62 ～ 65 回大会論文要旨集

本研究は日本保育学会第 66 回大会発表「ファーストステージ保育者の課題と現職教育（1）絵本の実践から」（2013）での発表をもとに加筆・修正を加えたものである。また科学研究費助成研究（基盤研究 C：課題番号 26381102）「保育者のファーストステージを支える『成長感』を核とした養成と現職教育の連携」（2014 ～ 2016 年度）の一部である。